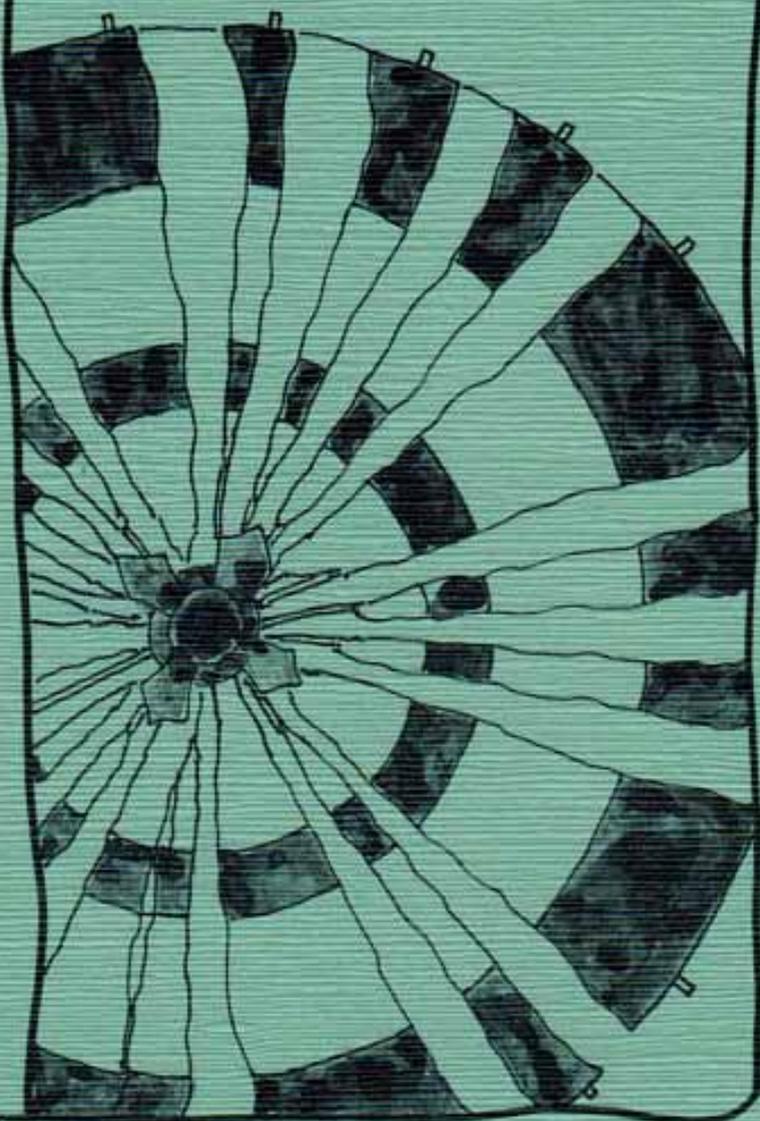


やぶれ傘



一二四号
二〇二二年二月

換気するたびに目を遣る冬の雲	根橋宏次
龍の玉もとのとおりに隠しけり	きくちきみえ
竹林の闇が深まる空つ風	大島英昭
春近しふたり待ちある理容室	丑久保 勲
鳩の群に雀来てゐる春隣	廣瀬雅男
引き潮の時は地続き枯葎	瀬島酒望
かくれんぼたれか冬木の陰にゐる	青谷小枝
春隣光る首輪で跳ねる犬	小山よる
コーヒー苦しストープの櫓弾け	藤井美晴
風花のホームへ西下する列車	渡邊孝彦
裏木戸に薄日差しくる花八手	秋山信行
小春日の夕日を後に土手下る	白石正躬
白壁に一月のかけ薄くあり	有賀昌子
遠く船蜜柑畑に陽の射して	安藤久美子
ぼろ市の柳行李の古着かな	天野美登里

抄 集 句 傘 紀 大 崎 ぶ れ や

枯れ葎ブルドーザーが迫りくる	石塚清文
スマホ持たずやや世に離る十二月	岩藤礼子
音もなく追ひ越す影や冬の朝	神山市実
豆大福包む薄紙雪もよひ	倉澤節子
退院の話を開けり年の暮	黒澤次郎
初詣子の横顔の大人びて	小泉里香
ひとりごと言ひつつひとり年用意	小巻若菜
いつも行く蕎麦屋の窓辺冬菫	手島百合子
玉砂利に深く杖つく初詣	中島和子
神棚へお供を子は脚立にて	貫井照子
寒波くる手術になると友は云ふ	萩原久代
月白の田圃に犬の声のして	本郷美代子
真正面に富士のある道枯尾花	村田 武
冷たいねと言ひて放さぬ手の強さ	武藤節子
やはらかき朝日の届くお元日	山本久枝

スプマンテ

大崎紀夫

晴れわたる日の裸木となつてゐる
砂利道のそこに猫じやらし枯れ
小六月なにを干すのか庭に莫塵
雪はげし飲み屋の方へ道わたり
枯すすき目を覚ましては釣つてゐる

冬の蠅見てゐるうちに眠くなる
人日の浮雲空のはしつこに
鱈汁の湯気電灯のあたりまで
牡蠣小屋のうしろが暮れてきたりけり
冬のバラ咲かせてトタン塀に穴
スプマンテの泡がしゅわしゅわ冬の星
からす鳴く近くで亀が鳴いてゐる

冬の雲

根橋宏次

牡蠣殻の山のあひだを抜け海へ
 菜箸は紐でつながれ十二月
 十ほどを数へそこらの初雀
 葉牡丹が巢鴨信金入口に
 鳴らしてはぽっぺんを売る坂の店
 筆箱はブリキの造り寒に入る
 涸川の石を拾って投げにけり
 換気するたびに目を遣る冬の雲
 石窯をピザの出てくる冬の雨
 海鳴りを夜つぴて厚き蒲団より

龍の玉

きくちきみえ

板塀に日向の匂ふ花八つ手
 アンパンの鞆に潰れぬる師走
 手のひらに包丁の跡餅を切る
 積雪の工事現場の赤い紐
 盛られたる一人前といふおでん
 ホタルノヒカリ流れてゐたり爛の酒
 柏手を打つそばにゐる寒鴉
 白鳥の鴨押しのかけて寄りきたる
 太陽に背を向けてゐる日向ぼこ
 龍の玉もとのとおりに隠しけり

空つ風

大島英昭

掌に乗せてまだ色薄き竜の玉
玄関にポインセチアが置かれ留守
マフラーをふた重に上野広小路
からつ風ピザ屋の前の駐車場
木の葉飛び木の葉のやうに雀飛び
道端の稲荷塗り立て雪もよひ
農協をでればふはりと雪がくる
用具小屋裏をととひの雪薄く
尻見せて犬が前ゆく寒夕焼
竹林の闇が深まる空つ風

春近し

丑久保勲

バス停の時刻表見る小六月
ゴミ袋に詰めるだけ詰め柿落葉
避雷針の黒き一本冬夕焼
灰色の雲ちぎれゆく冬夕焼
カフェの席ひとつ空きある冬の午後
茶の花の見える山門くぐりけり
冬の夜はベートーベンを聴いてある
孫に買ふドイツの絵本クリスマス
フレんツェのセーターだいぶ着古して
春近しふたり待ちある理容室

一里塚辺り枯草ばかりなり
境内の撫で牛撫でる冬紅葉
関伽桶の家名薄らぎ冬紅葉
家紋ある土蔵背にして干し大根
海人の家蜜柑の皮が干してある
どんどんと西より雲が来て真冬
何となく弦をはじめてみる冬至
起重機をおりてくるひと冬夕焼
病室は窓嵌め殺し空つ風
引き潮の時は地続き枯葎

枯葎

瀬島洒望

春隣

廣瀬雅男

焼き芋を買ひ小走りになりにけり
バス停に破魔矢の人と並びけり
一羽来て二羽きて三羽初雀
初鳩や日当たる駅の東口
門前に雪だるま立つ町工場
近づかず離れず二羽の寒雀
初夢は忘れてしまふほどのもの
冬草にタイヤの跡の新しく
山越えて風の吹き来る冬桜
鳩の群に雀来てゐる春隣

冬木

青谷小枝

あの辺は畦のふくらみ草枯れて
竹藪に冬日ななめにさしてゐる
かくれんぼたれか冬木の陰にゐる
能登に来て雪雷のたてつづけ
雀鳴いて電線の雪よくしづる
風花の屋根の高さに来て見ゆる
雪の夜を来てラーメンは味噌バター
川の町わたむしほどの風花が
なんとなくくづしてゐたる根槽の火
鏡餅板の間にある陽のぬくみ

寒灯

小山よる

落葉から何か拾つてゐる鴉
店先にタオル売られてゐて時雨
マネキンは昨日と違ふコート着て
冬の陽のあたる車で寝てゐたり
鳩飛んでまた飛んでくるお元日
カラカラと絵馬が鳴り出す冬社
加湿器の湯気の立つ音だけがする
寒鯉に話しかけたる人のゐて
寒灯の下に知人に似る背中
春隣光る首輪で跳ねる犬

梢

藤井美晴

万両に少しのあひだ日が当たる
ベランダに何か来てゐる寒の月
枯れ葦がをりふし傾ぐ向う岸
来年の暦の上の古暦
湯たんぽのトタンの波を撫でてみる
横ざまに朝日差し込む冬木立
新しき切株二つ冬木立
裸木の梢にかかる二十日月
寒月の昇ればちりめん波ひかる
コーヒー苦涩しストーブの梢弾け

風花

渡邊孝彦

二回焚きするてふ大根焚の味
ブランチを終へ短日の店外へ
送電塔囲む金網蔦枯れて
白菜が積まれたままに猫車
炭焼きの小屋に積む薪猫過る
芽キャベツの畑が表具店の裏
浮寝鳥薄目を開けてゐるのもゐ
青白き聖樹ロビーに置く病院
寒林の台地が続く下は墓地
風花のホームへ西下する列車

花八手

秋山信行

暮早しサッカー場に灯の点る
すれ違ふ人の親しさ冬の朝
雪くるか浪の重たき出雲崎
裏木戸に薄日差しくる花八手
凍て空の畑にばらまくお礼肥
煮凝りの小骨をよける朝餉かな
冬うらら底藻を揺らす鯉のゐて
数へ日の裏階段を駆け上る
二人して言葉少なに去年今年
賀状着く中身は後で見るとして

小六月

白石正躬

屋敷門の少し向うに石路の花
小春日の夕日を後に土手下る
川べりで人の声する小六月
早暮れて太い葱入りかけうどん
冬灯田圃のそばのラーメン屋
年明けの雀の声がして来たる
日向ぼこ子は縄跳びの数かぞへ
人日の土手から川を見て戻る
北風に駅北口で吹かれけり
風花は鉄骨たたたく鉄工所

遠く船蜜柑畑に陽の射して
珈琲とサンドイッチへ冬の風
ポケットに手袋しまふベンチかな
掘割にほとりと浮かぶ冬紅葉
蓋とればやはり煮凝り朝の鍋
うとうとと炬燵に深夜放送を
洋風に調理の牡蠣の皿並ぶ
伊達巻のスペア二本が恒例に
散策は银杏落葉を踏む舗道
樹の下に眠る柴犬枇杷の花

炬燵

安藤久美子

一月

有賀昌子

短日のクレインが入日吊るすかな
休日の知事公舎背に枯葉散る
餌をくはへ逃げる鴨あり追ふ鴨も
落葉みち紺の暖簾の呉服店
車止め雁の渡るを見てゐたる
年新た良くも悪くも齢八十
折込のチラシずつしりお元日
トーストに餡バター塗る七日過ぎ
春近し千歩に満たぬ歩数計
白壁に一月のかげ薄くあり

◇3月・4月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
3月	1日(火)	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	1日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	2日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	4日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6:00	なごみ会	武蔵浦和コミセン	秋山 信行
	19日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	26日(土)	AM10:00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
4月	1日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	1日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山 信行
	4日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン1	丑久保 勲
	5日(火)	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	5日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	16日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	17日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	さいたま市・見沼	丑久保 勲
	23日(土)	AM10:00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	23日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

4月17日(日)の吟行。

集合 10時、JR京浜東北線・北浦和駅。

吟行地 さいたま市・見沼。(浦和西高校の東側一帯)。

句会場 武蔵浦和コミセン第3集会室

◎連絡先 秋山 信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856

ぼろ市の柳行李の古着かな
 湖の岸辺にほへる若菜摘み
 初東雲紐締め直す登山靴
 窓越の日は板の間に冬半ば
 公園に残る雨風冬桜
 枇杷の咲く空家の庭に雀来る
 午後五時の時報のポーカーが蜜柑山
 テレビ体操みつつ飲みけり玉子酒
 橋桁の付け替へ工事暮早し
 小春日の流れに亀が泳ぎゐる

ぼろ市

天野美登里